

頼盛形象を規定するもの

——「平家都落ち」像変貌の方向を探りつつ——

鈴木 彰

一 はじめに

池大納言頼盛脚の事不義也。縦頼朝内々此人に痛給ふ事有とも。是は頼朝の義道を存せらるゝ事にして。全頼盛の義道と成にあらざ。且は又頼朝。源氏の大功を立ん策の爲に。其縁有に便て頼盛を懐心深かるべし。然るに頼盛平家を見捨給ふ事。是義有にあらざ。或又平家不道にして。与しがたき事を存せば。世を捨身をかくすこそ責ての事成べけれ。平家の運尽ぬれば。頼朝にこそ助られんずれと思ひて。忽に主上を見すて。平家の一門を背て帰られける事。是大きな恥辱たるべし。縦源氏へ帰て身を立給へばとて。心有者いかにぞ是を善と存て交を深し。親む者有べけんや。故 徳廉からざる事如此。

右は慶安三（一六五〇）年刊『平家物語評判秘伝抄』巻第七之下「一門都落」に見える、頼盛都残留に関する記述である。同書は「平家物語中の人物・事件を素材として封建道徳及び兵法を説

くもの」と言われる。そこで参照された語り本系の本文では、頼盛は都落ちする平家一門を見限り、頼朝を頼つて都に留まる（本文後掲）。近世期に義を重んじる立場から、そうした行動を評した言辞は傍線部のごとく極めて厳しい。こうした頼盛評は『平家物語抄』（作者・刊年未詳）とも重なっており、近世における頼盛という存在が持つイメージの枠組みを知ることができる。

しかし、遡つて都落ちという事件が起きた当時の頼盛に対する視線は、これと大きく色合いを異にしている。「吉記」寿永二（一一八三）年七月廿八日条には次のようにある。

……重仰云、頼盛脚帰仁、撰乎参上、年来又有奉公志、可被免否可計申。予申云、帰降者無被征伐之例。今度不被宥者、誰人又帰仁乎。就中件脚故入道相国之時、度々雖有不快事、今度殊造意不聞。只為一族許歎。尤可被寛宥。人々皆一同。

蓮華王院において、京中の狼藉停止・神器の沙汰などが僉議される中で、都に留まった頼盛の扱いも問題となる。頭弁兼光が伝えた後白河院の仰せに対して、予（経房）は「可被寛宥」との意

見を述べ、列座した人々の賛同を得ている。その背後には、傍線部のような政治的な配慮があったにせよ、「就中」と語り続けられる、「今度殊造意不聞。只一族許歎」という言葉を含む波線部の表現から、一門内での微妙な立場を背負わざるを得なかつた頼盛に対する同情のまなざしが看取されることもまた確かである。都に迫る義仲軍を防ぐため、宗盛が「再三辞」する頼盛を「セメフセ」て山科に派遣し、その後いざ都落ちとなると頼盛には何の連絡もしなかつたと「愚管抄」巻第五が記し、また「玉葉」もこれに先だつて頼盛の一門内での特異な立場を語る記事を載せていること（治承三年十一月廿二日条、養和元年四月一日条）は著名な事実である。右の僉議は、当時の頼盛が一門内で異分子扱いされていることが周知の事実であり、かつ彼への同情的な目を同時代の人々がある程度共有していたことを示唆するものと言えよう。さて、以上に見た二つの頼盛評には極めて大きな隔たりが存在する。こうした落差はいかにして生成されていったのであろうか。以下本稿では、この懸隔が生みだされる過程に作用した力をいくつかの観点から解明してみようと思うのだが、その途上では「平家物語」（以下「平家」）が語る（平家都落ち）像変貌の方向との相関性を測りつつ検討を進めることとする。それによつて、頼盛という一人物のイメージを形態とは離れた姿へと方向付け、それを規定し続けた物語の力や存在感が照らし出されることともなるだろう。

二 二つの頼盛像

まずは、現存「平家」諸本の間に、大きく二つの頼盛の姿があることを確認しておきたい。先に語り本系諸本が語る姿として、覚一本（巻第七「二門都落」）の記述を概観しておこう。

覚一本の頼盛残留話は、「池の大納言頼盛脚も池殿に火をかけて出られけるが、鳥羽の南の門にひかへつ、「わすれたる事あり」とて、赤じるし切捨て、其勢三百余騎、都へとつてかへされけり」と導入され、「抑池殿のとゞまり給ふ事をいかにといふに、兵衛佐つねは、頼盛に情をかけて、：（中略）：など情をかゝれば、「一門の平家は運つき、既に都を落ぬ。今は兵衛佐にたすけられんずるにこそ」とのたまひて、都へかへられけるとぞ聞えし」などと記されていく。ここでは頼朝の情けが繰り返され（傍点部）、ひとたびは一門と共に邸宅に火を懸けて出立しながら、その情けを頼つて心変わりすることを明言する頼盛の姿も記されている（波線部）。語り本の中で、頼朝との縁に導かれた一門離反者としての形象が最も顕著なのがこの覚一本なのだが、傍点部や波線部の表現を持たない屋代本でも、「池大納言頼盛ハ、池殿ニ火懸テ被出ケルガ：（中略）：鳥羽北門ヨリ都へ引ゾ返サレケル」と導入された上で、頼盛を氣遣う頼朝の誓言と討手の使者への注意が記されている。その点に類同の状況を示す八坂系諸本とも併せて、語り本には基本的に等しい姿を認めることができる。これに対して延慶本では、頼盛が残留を決意する言葉の冒頭に「行幸ニハラクレヌ」とあることから、彼は一門と行動を共にしていないことが知られる。また同本には続く八条女院とのやりとりの中で、女院を氣遣い、自らの運命を受け止める深い姿が描き

出されている。⁽⁵⁾さらに、残留決意の根拠は清盛・宗盛ら主流派の一門内対立とされ、それを象徴的に語る平家重代の刀剣・抜丸の相伝をめぐる争いの話が続いてもいた。⁽⁶⁾つまり、そこには語り本のごとき一門離反・心変わりには特に描かれていないのである。

加えて頼朝との関係を捉える姿勢にも相違が見られることを指摘しておかねばなるまい。先述した通り、延慶本は一門内対立の存在を頼盛残留の所以とする。ただし、同本でも頼盛は八条女院との会話の中で頼朝の存在を口にしてゐる。女院の御所を訪れた頼盛はまず、出家入道して後生を助かろうと参上した由を告げる。女院は源氏が入京しつつある現状に鑑み、御所内に滞まることの困難さを口にするが、頼盛は事態に応じてすぐに退出する由を言上する。頼朝のことが初めて話題に上るのはその後である。

女院又、「イカニモヨク／＼相ハカラハルベシ。但シ源氏ト
旬ハ伊豆兵衛佐頼朝ゾカシ。ソレハノボラヌヤラム。上リタ
ラバサリトモ別ノ事ヨモアラジ。カシコクゾ故入道ト一心ニ
テオワセザリケル。今ハ人目モヨシ。平家ノナゴリトテ世ニ
オウシナムズ」ト仰有ケレバ、頼盛、「世ニアリト申候
ハ、定テ今ハ何事カハ候ベキ。只今落人ニテアチコチサマ
ヨウム事ノ悲サニコソ、カヤウニ参テ候へ。仰ノ如ク、頼朝
ガ方ヨリ度々文ヲタビテ候シニ、故母ノ池ノ尼ガ事ヲ申出
テ、「其形見ト頼盛ヲハ思フ。世ニ有ラムト思モゾノ為ナ
リ」ト、毎度ニ申テ候シナリ。其文コレニ持候」トテ、(文
を女院の見参に入れる・略) (第三末 廿六「頼盛道ヨリ返給事」)

注意すべきは、頼朝の存在は女院の側から持ち出されているこ

とである(傍線部)。頼盛はその仰せをうけてもなお覚悟を變ずることない言葉を連ねた後、ようやく頼朝との関係に言及する(波線部)。しかし、傍点部「仰ノ如ク」とあるように、頼盛が頼朝との関係に言い及んだのは、あくまでも先に女院の「仰」があつたがゆえとされているのである。波線部の言葉に語り本が持つ表現と通じるところがあるのは確かだが、両者の間には、頼朝との縁を捉える頼盛の根本的な姿勢に明らかな相違が存するのである。

現存延慶本が延慶二・三(一一三〇九・一〇)年の本奥書を持つ応永二十六・七(一一四一九・二〇)年書写本であり、覚一本が応安四(一二三二)年の奥書を持つことを一応の目安とすれば、物語の受容過程において変貌を始めた頼盛像は、十四世紀中にはこうした二つの像が併存する段階へと至つていたと考えられよう。その上で注目したいのが、従来抜丸話を持つ諸本群(延慶本・盛衰記など)と語り本との間で捉えられてきた頼盛の残留理由・人物形象の相違⁽⁷⁾に関して、実は前者を含む読み本系諸本の間でも質の違いが認められるという事実である。⁽⁸⁾続いて盛衰記の検討を糸口として、その点を掘り下げてみたい。

三 〈平家都落ち〉の変貌との相関性

都落ちに関する延慶本と盛衰記の構成は大きく異なる(構成表参照)。⁽⁵⁾維盛都落ちと⁽⁶⁾頼盛都残留とが接続し、一門の他の人々の動き⁽⁹⁾以下)に先行するという延慶本の構成上の特徴が、一門内での対立の存在を語る同本の叙述志向と連動していることは前稿で指摘した。以下には、盛衰記では⁽⁵⁾⁽⁶⁾が分離されて

いる点に着目してみたい。

当該部分の盛衰記を読み進めていくと、維盛以下小松一家の不参を不安視する宗盛の姿を語る⑨の中に、越中次郎兵衛盛嗣の「池殿ハ御留ニコソ。侍一人モ見エ候ハズ。口惜侍者哉。……」という言葉があり、また、「池大納言ノ一類ハ今ヤ〜ト待レケレ共、落留テ見エ給ハズ」という一文を含む⑩が、内容的に⑨と繋げられていることに気が付く(⑩が挟まれる意味は後述)。頼盛一類の不参を前提とする表現を含み持つこれらは、文脈上⑥の後にあつて然るべきものである。盛衰記はこれらを敢えて⑤に続けることで、維盛関連の話題の集約化を図っていることが窺い知られよう。同じく⑤の中に維盛と北方の馴れ初め話が挟み込まれていることも、こうした判断の妥当性を示している。

これに関連して、盛衰記⑤維盛都落ちの中には、延慶本には見えない、次の傍線部の^(c)とき表現が多出することを看過し得まい。

(a)……中將ハ「兼テ申侍シゾカシ。具シ奉テハ御身ノ為縁惜ケレバ、只留給へ。維盛西海ニ下テ水ノ底ニモ沈ミ、敵ニモ討レンマノアタリ御覽ゼン事イカ計カハ悲カルベキ。露恩ノ事ハナキ者ヲ。角ナ歎給ソ」ト宣ヘバ、北方「イカニ角ハ聞ユルゾ。後ノ世マデモトコソ契シニ、今更打捨給フ事心ウサヨ」トテ、涙モセキアヘズ御座ケルヲ見ニ付テモ、為方ナク思召ケレ共、様々ニ誘給ケル程ニ、ホド経、時移ケレバ、

(b) (資盛以下)「……イカニ今マデ角テハ御座候ゾ」ト宣ケレバ、三位中將ハ「少キ者共痛慕侍ヲ誘侍程ニ」トテ、涙ニ咽テ立給ヘリ。北方ハ胄ノ袖ニ取付テ、「サテ打捨テ出給フ

記事構成表

延慶本第三末	盛衰記卷第三十一〜二	(四)	(南)	(寛)
①主上都落ち	①	①	①	①
②六波羅焼亡	②	②	②	②
③六波羅邸	③	③	③	③
④家貞都落ち	④	④	④	④
⑤維盛都落ち	⑤	⑤	⑤	⑤
⑥頼盛都残留	⑥	⑥	⑥	⑥
⑦拔丸事	⑦	⑦	⑦	⑦
⑧八幡大菩薩示現	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨宗盛落涙	⑨	⑨	⑨	⑨
⑩小松一門合流	⑩	⑩	⑩	⑩
⑪平家名寄せ	⑪	⑪	⑪	⑪
⑫近衛殿帰洛	⑫	⑫	⑫	⑫
⑬貞能帰洛	⑬	⑬	⑬	⑬
⑭頼盛門前落首	⑭	⑭	⑭	⑭
⑮貞能に院中騒動	⑮	⑮	⑮	⑮
⑯主なき都	⑯	⑯	⑯	⑯
⑰東国武士の沙汰	⑰	⑰	⑰	⑰
⑱平家石清水に祈願	⑱	⑱	⑱	⑱
⑲忠度都落ち	⑲	⑲	⑲	⑲
⑳行盛和歌	⑳	⑳	⑳	⑳
㉑経正都落ち	㉑	㉑	㉑	㉑
㉒青山の沙汰	㉒	㉒	㉒	㉒

注 諸本の略号は以下の通り。(四)……四部本巻第七、(南)……南都本巻第八、(寛)……寛一本巻第七。A、Bは盛衰記独自記事。C(法皇鞍馬入り)は他本では表示部分以前にある。この表は、各本の記事の存在と掲載順を延慶本を基点として示したもの。

「ニヤ」トテ、叫給。若君姫君モロ共ニ左右ノ袂ニカナグリ付テ、我捨ラレジトゾ慕ヒ給。三位中将ハ余ニ無為方被思ケレバ、重藤ノユミノハズニテ御簾ヲサト搔揚テ、弟ノ殿（共ニ卷第三十一）「維盛惜妻子」

別離を余儀なくされた夫妻・親子の辛苦を印象づける表現はこれら他にも多く、盛衰記では別れの名残惜しさを表現化する姿勢が大きく増幅していることが知られるのである。

こうした一連の維盛話の中にある⑦は一見異質な存在にとみえる。しかし、当該部分は、

畠山庄司重能・小山田別当有重兄弟二人ハ年来平家ニ奉公シテ、都落ニモ御伴申テ、泣々淀マテ下タリケルヲ、大臣殿御覽ジテ近兩人ヲ召テ、：（中略）；重能・有重畏テ、「身ハ恩ノ為ニ仕レ、命ハ儀ニ依テ輕シ」ト云事アリ。年来恩ヲ蒙テ身ヲ助妻子ヲ養ヒ候キ、今更子ガ悲ク、妻ガ恋ケレバトテ、争見捨奉ヘシ。落着御座サン所マテハ御供也」ト申セバ、人ノ親ノ子ヲ思フ志、尊モ卑モ替ル事ナシ。サレバ子ハ東国ニアリテ源氏ニ随ヒ、親ハ西海ニ落チ身ヲ亡サン事不便也。只トクノ頸ヲ延テ頼朝ニ随テ、再妻子ヲ相見ルベシ。ツユ恨ト思ヘカラス」ト宣ケルコソヤサシケレ。二人ノ者共二十余年ノ好ナレバ、遺ハ実ニ惜ケレ共、サスガニ身ノヌテ難サニ、泣々都へ上ニケリ。（卷第三十一）「畠山兄弟賜暇」とある。延慶本で畠山らは「日来召カレタリツル東国者共」「ヨリフシ在京シテ大番勤テ有ケルガ」（廿八）「筑後守貞能都へ帰リ登ル事」とされている。その在京理由（傍線部）を比べても、あ

るいは波線部のごとき独自の言葉のみても、盛衰記では平家への恩義が特に打ち出されており、それが彼らの「遺」^②惜しき心情を一層際立たせることとなっている。と同時に、波線部は一面で夫妻・親子の別離をも問題としていることにも留意しておきたい。

改めて一連の流れを振り返れば、⑤で妻子との別れに揺れる維盛の姿が描かれ、⑨でその維盛の行動を不安に思う宗盛が記される。そして、同じく妻子を思いつつも敢えて重恩を優先しようとしたが、結果的には平家を離れた畠山らの姿が⑩で示された上で、⑩で妻子と別れた維盛の一門への合流と宗盛の安堵が続けられる。このように、盛衰記の⑤、⑨、⑩には近親者との名残惜しき別離を語る、維盛の心理を軸とした脈絡が存在するのである。

そうした流れは、盛衰記ではさらに②経正やA景家の都落ち話が続けられること、そしてそれらの扱いをみれば一層鮮明となる。すなわち、都落ちの際に仁和寺を訪れる経正の話は、「修理大夫経盛ノ子ニ但馬守経正ト申ハ、入道ノ甥也。童形ノ程ハ幼少ヨリ仁和寺宮ニ（二）侍候テ御愛弟ニテオハシケルガ、是モ都ヲ落ケルニ、昔ノ好ミ忘難ク覚エケレバ、最後ノ見参ニ入進セントテ……」と語り出される。また、続く景家の話は、北国合戦で戦死した飛騨判官景高の子を、景高の父である飛騨守景家が自分の老母のもとに預けて都落ちに同行するという話である。盛衰記のみに存する本話は、「飛騨守モ御伴ニトテ出立ケルガ、三歳ニナル孫ニ遺ヲ惜ツ、イカセセントゾ悲ケル……」と導入される。そこには景家母の「我身縦若ク盛也トモ、懸ル乱ノ世中ニイカニシテカ育ベキ。況八十二余テ今日明日トモ知又命也。行末遙々ノ少

キ者ヲ何トセヨトテ捨預テハオハスルゾ。縦情ナク老タル母ヲコソ振捨テ出給フ共、恩愛ノ別ニ悲ニ打副テ歎ヲ重給事コソ心ウケレ。イカナラン野末山ノ奥ヘモ具行給ヘ」といふ悲嘆が綴られ、そののち「弓矢トル身ノ哀サハ、人ニ弱氣ヲ見ゼジトテカナグリ棄テ出ケレドモ、涙ハサキニス、ミケリ」と結ばれるのである。盛衰記では維盛話以降、名残惜しき者との別離という主題の下に話題の並列・集約化が図られていることはもはや明らかであろう。

盛衰記はこうして、平家の人々が名残を断ち切り、最終的には一門としての結束を優先させて、揃つて都を離れていった状況を語る。そして叙述は、維盛・経正・景家らの姿にみる人々の悲嘆の堆積を総括する形で落ち行く平家の名寄せ⑩「落行平家ハ誰々ゾ……」へと続く¹⁰。この間の叙述は、幾つもの別れが醸し出す哀感によつて、都落ちという事件を色づけている。そしてそれは、別離の状況を集約的に語るといふ、延慶本とは異なる叙述展開と相俟つて、より印象づけられているのである。盛衰記の都落ち叙述は、一門内対立の浮上を打ち出す延慶本のそれとは確実に焦点を異にしており、そこに悲哀感を前面に表出するものへと変貌したへ平家都落ちが像を結んでいることが知られるのである。

こうした叙述展開を⑥頼盛残留話の様相、そして頼盛形象と切り離すことはできない。

池大納言頼盛脚毛池殿ノ亭二火ヲ懸テ鳥羽ノ南赤江河原マテ落給タリケルガ、赤旗赤注チギリ捨テ此ヨリ都へ帰上ル。八条女院ノ御所仁和寺常葉殿ニ参籠給ヘリ。落残ル勢僅二百余騎也。兵衛佐ノ許ヨリ度々被ニ申送ケルハ、「平家追討ノ院

宣ヲ下給ル上ハ私ヲ存ズベカラズ。御一門ノ人々可恨申テ候。但御アタリノ事ハ驚思召ベカラズ。故池尼御前二難、遁命ヲ被ニ助進テ今ニ甲斐ナキ世ニ立廻レリ。其御恩争カ奉志ベキナレバ、イカニモ報ヒ申サントコソ存ツレ共、後レ進ヌレバ力及バズ。今ハ故尼御前ノ御座ト深思進スレバ、頼朝角テ世ニ立廻リ候ハ、朝恩ニモ申替テ御宮仕申ベシ。ユメ〳〵嬌飾ノ所存ニアラス」ト被ニ申タリケル上、法皇仰之旨モ有ケルヲ懸テ留給フ。又同侍ニ弥平兵衛宗清ト云者アリ。兵衛佐平治ノ逆乱ニキラルベカリケルヲ、此宗清池ノ尼御前ノ使トシテ兎角詞ヲ加テ、死罪ヲ申有タリケルニ依テ、兵衛佐思忘給ハズ。国々ノ兵ヲ差上セ給ケル時モ、「穴賢、池殿ノ殿原ニ向テ弓矢ヲ引事有ベカラズ。又宗清兵衛ニ手カクナトゾ被ニ誠仰ケル。平治ニ頼朝助リテ寿永ニ頼盛遁給フ。周易ニ積善之家有余慶、不善之家有余殃ト云本文アリ。誠哉此言人ニ情ヲ与ルハ我幸ニゾカヘリケル。(卷第三十一「頼盛落留」)

頼朝の情けとそれを持つ頼盛の姿が全体を覆っていることは一読して明らかである。こうした姿を、改めてここまで検討したような流れの中で受け止めてみるならば、結束して行動する一門を捨てて他門へ身を転じたという色彩が濃くなるのは必至であろう。その点と関わつて、引用冒頭の傍線部に注目したい。頼盛もひとたびは一門の都落ちに同行したとされているのである。延慶本の頼盛は先述のごとく一門に遅れたものとされており、盛衰記では頼盛の残留は明確な心変わりとなされているのである。

こうした離反者としての彼の行動が、一連の叙述展開において

他ならぬこの位置に据えられ、唯一特権的に有していた関係性ゆえのものとしてされることで、揃って都落ちせざるを得なかつた一門の立場が対照的に浮かび上がってこよう。また、そうした立場の違い、すなわち運命の明暗を分ける境界線が示されることで、都落ちに伴う悲哀感もまたその輪郭を際立たせることとなる。本節で述べた通り、盛衰記は一連の叙述展開を通じて、都落ちに伴う哀感の表出を志向している。その一面で延慶本にはなかつた離反者頼盛の姿を打ち出す所以は、一門を捨てた弾指すべき存在を描き込むためにはとどまるまい。より根元的には、先述したごとく、悲哀感の表出を基調とするへ平家都落ちの像への志向に適う、新たな人物像が求められたものと考えられるのである。

四 頼盛形象の方向とその普遍性

さて、頼盛形象変貌の方向性を考えるとき、この後鎌倉に下る際の姿にも目を向けおく必要がある。その場面の冒頭で盛衰記は、「同五月十五日、前大納言頼盛脚上洛シ給へり。関東ニテ被賞翫給ケル事、心モ詞モ及ガタシ」と、鎌倉下向の結果とそれへの評言を先に示し、改めて次のようにその顛末を語り出す。

此人鎌倉へ下り給ケル事ハ、平家都ヲ落給シニ、共ニ打具シテ下給シ程ニ、兵衛佐ノ兼テノ状ヲ憑テ道ヨリ返給ヘリ。彼状ニハ、難逃命ヲ寛シテ生ラレ奉リシ事偏ニ池尼御前ノ芳恩ニ侍リ。其御志生々ニ忘難シ。頼朝世経廻セバ、御方ニ奉公仕テ、彼御恩ニ可奉報。コノ条、飾ノ作り言ニ非ズ。且ハ二所八幡ノ御知見ヲ仰グト、度々被申上タリケレバ、深其

条ヲ憑テ落残リ給タレ共、頼朝コソ角ハ思フ共、木曾冠者十郎藏人我ニ情ヲ置ベキニ非ズ。イカバ成行ンズラン。

(巻第四十一「頼盛関東下向」)

盛衰記はここに、延慶本にはない「平家都ヲ落給シニ、共ニ打具シテ下給シ程ニ」(傍線部内)という状況理解を付している。波線部の内容と併せて、前節末に検討した残留話⑥との内容的照応が図られている。残留理由の変化に伴って、頼朝との関係の中で頼盛の行動が一貫して捉えられるようになっているのである。

さらに、当該記事の結びも特徴的である。

……命ヲ生給ヘルダニモ難有、剩へ徳付所知得給ヘリト披露有ケレバ、人ノ口様々也。或ハ一家ノ疵ヲ顧ズ、一門ヲ引分テ永ク名望ヲ失テ今ニ存命ヲ全スル事不可然ト、ト謗ル者モアリ。又、池尼公頼朝ヲ不有シ生、頼盛争カ虎ノ口ヲ遁テ

鳳城ニ還ラン。積善家ニハ有余慶ト云。誠ナルカナト、ト羨嘆

ル者モアリ。其口何レモ理也。(巻第四十一「頼盛関東下向」)

盛衰記は頼盛の上洛までを語つた後、それに対する批評の言を独自に付している(傍線部以下)。「人ノ口様々也」、「其口何レモ理也」という言葉に表れた、盛衰記の柔軟な価値観を見逃せないことはもちろんだが、ここで注目したいのは、立場の違いこそあれ、二重傍線部 a・b 共に頼盛が一門と離れて都へ引き返したことを評している点である。特に後者は、頼朝を侍んで帰還したとの理解に基づいている。こうした認識が盛衰記に定着していることは、傍線部 b の表現が、都残留話末尾の表現(前節末引用中二重傍線部)に通じているという一事をみても明瞭であろう。

以上のように、盛衰記では頼朝との関係を持ち、一門から身を翻した人物として画一的に頼盛を捉え、叙述を進める姿勢が広く定着していることが知られる。この点に、盛衰記における、延慶本とは質を違えた頼盛形象の方向を認めることができよう。

ところで、都落ち叙述の構成とも関わって、頼朝との関係にひかれた転身という色を打ち出している伝本は、盛衰記に限られるわけではない。例えば四部本を見てみると(構成表参照)、⑨⑩の中には盛衰記同様の先取り表現(前節)を含んでおり、かつ⑪平家名寄せを挟んで維盛話⑤⑨⑩と頼盛話⑥⑬とが対照的に配置されている点も盛衰記と共通する。具体的な姿としても、「池大納言頼盛池殿火懸テ打出下」と一門に同行したものの、結局池禅尼と宗清への恩を語る頼朝の言葉を「憑」んで都に留まったとある。盛衰記とは位置を異にする記事も存在するが、頼盛の扱いやそれと連動する都落ち像再構築の志向に関して、ある共通基盤の存在を窺うには充分であろう。また、関東下向の場面についても、その末尾に、「……非命生_下と徳付_上」弥平兵衛宗清此跡下西国_下付_上。屋嶋見人聞人莫_下不_上感歎_上之」と、宗清が西国下向し、それに感嘆が集まったことを特記する。こうした宗清との対照性の中で頼盛の分の悪さは一層際だつこととなっており、同本でも一貫して転身という負の側面を背負う形で頼盛は扱われている。

南都本もまた、盛衰記・四部本と同様の先取り表現を持ち、名寄せを挟んで頼盛の残留を位置付ける。その残留は頼朝から「度々誓状アリケレバ其消息ヲ馮テ」のものとなされ、頼盛に配慮するよう討手の者たちに注意する頼朝の言葉をも記す。さらに、

同本では近衛殿の帰還を語る中で、平家方の「近衛殿ヲ落サセ給候。ハヤ心ウク候物カナ。池殿ヲ御心替リトテ留リ給フ」との独自の発言をも記しているのである。

かかる様相は第二節で述べた語り本とも通底している。覚一本によって補足的に述べておくと、構成面、特に⑩名寄せの位置について盛衰記以下の三本とは異なるものの、一門の人々の都落ち(⑤⑨⑩)を列挙した後に⑥頼盛残留を対照的に位置づけるという扱いは共通する。盛衰記等に共通して見えた頼盛形象の方向が語り本にも及んでいることは間違いない。このように伝本それぞれ独自の独自色や偏りの大小はあるものの、諸本展開に伴う平家都落ち像及び頼盛形象変質の方向には、本文系統の違いを越えた普遍性が見いだせることが以上から明らかとなるのである。

五 頼朝を語る素材

ところで、頼朝を待むという行動は無条件で批判されるべきものであったのだろうか。延慶本には、縁ある児玉党の「人ノ一家ヒロキ中へ入ト云ハ、カ、ル時ノ為也。軍ヲトゞメ給へ。和殿ヲバ御曹司ニ申テ助ウズルゾ」という言葉を頼りに降人となった樋口次郎兼光の行動が記されている(第五本 十「樋口次郎成降人事」)。また、四部本の段階でも、石橋山合戦の後安房へ逃れる船出の際、土肥実平が子息遠平を下船させる場面が独自に作り出され、遠平が平家方の伊東入道の掣であるから、「若、我、負、軍之時、子助、後憑」という実平の思慮を新たに描き込んでいる。このように、物語において戦後敵方の縁を待む姿は頼盛に限られたも

のではない。また、右傍線部の言葉や後出本で新たにかかる場面が創出されることをみると、敗戦後に頼るべき縁戚を平素から諸方に求めておく慣習が、物語を享受する環境の中に存在し続けていたことが推察される。物語の外でも、先の「吉記」の他の「玉葉」「愚管抄」等に残留後の頼盛の姿が何度も現れるものの、一門を離れたことへの批判的言辭は一切見いだせない。これらを勘案すると、延慶本に見えた潔い頼盛の姿が諸本展開の過程で失われ、普く一門からの離反者とみなされていくには、やはり何らかの要因が存在して然るべきであろう。その点について前節までには、都落ちという事件の全体像を悲哀感を際立たせつつ描き出そうとする志向との均衡の中で、頼盛の転身や二心などの側面が規定されていくという、諸本が共有する叙述基調を提示した。

その一方で、頼盛の残留や残留後の姿を語ることで、恩義をわきまえた頼り甲斐ある存在としての頼朝の姿が必然的に浮上するという構図も看過し得ないのではなからうか。それは決して「平家」に限られたあり方ではない。例えば「吾妻鏡」では、

(a)池前大納言并室家之領等者、載平氏没官領注文、自公家被下云々。而為酬故尼池禪尼恩德、申宥重相勸給之上、以二件家領卅四箇所、如元可為彼家管領之旨、昨日有_レ其沙汰。

(元暦元年四月六日条)

(b)武衛被遣御書於泰経朝臣。是池大納言、同息男、可被還任本官事、并御族源氏之中、範頼、広綱、義信等可被聽一州国司事、内々可被計奏聞之趣也。大夫属入道書此御書、付雜色鶴太郎云々。

(同五月廿一日条)

などが挙げられる。(a)は頼朝による池大納言家領返付の沙汰を記す著名な一条。(b)には頼盛父子の本官還任を頼朝が奏聞したことが記される。ちなみに(b)を受けて、同六月廿日条には小除目の聞き書到着について、「武衛令申給人無相違。所謂権大納言平頼盛、侍従同光盛……」ともある。さらに、鎌倉へ下つていた頼盛の帰洛の際には、「武衛招請池前重相給」、「金作剣一腰」「砂金一囊」「鞍馬十疋」他数々の「引出物」があつたとする(同六月一日、五日条)。ここでその他全ての用例を列挙することは控えるが、同書において頼盛の名は、一例を除いていずれも右のごとく頼朝の行動を語る中で現れるのである。特に(a)の傍線部は、そうした行動を支える頼朝の本意を表現している点、見逃せない。このように「吾妻鏡」では、頼盛との関わりの中で、過去の恩義を重んじる頼朝の姿が鮮明に立ち現れているのである。

「平治物語」(以下「平治」)にも類似した傾向が読みとれる。池禪尼に対する頼朝の恩義が平治の乱後の助命嘆願に由来するという話題を「平治」諸本は有している。そこには、「御恩によりて、命を助られまいらせぬ。此御芳志、生々世々にも、いかでか報じつくしまいらせ候べき」(古態本下巻「頼朝遺流の事付けたり盛康夢合せの事」。流布本略同)といった頼朝の言葉が存在する。そしてこの後、後日譚として頼朝拳兵と平家追討の概略が記されるが、その中で問題の平家都落ちと頼盛の都残留が述べられる。

(古態本) 寿永二年七月廿五日、木曾冠者、都へ責のほり、平家、都を落ぬ。「池殿の御子息は御留候べし。故尼御前を見参すると存候べし」と、内々、起請状、進せられたりけれ

ば、それをたのみに留まり給ぬ。本領、少もたがはざりけるうへ、所領あまた、まいらせられけるとかや。

(流布本) 寿永二年七月廿五日、北陸道をせめのぼりける木曾義仲、まづ都へ入と聞えしかば、平家は西海におもむき給ふ。されども、池殿のきんだちはみな都にとまり給ふ。其ゆ

へは、兵衛佐鎌倉より、「故尼御前をみ奉ると存じ候べし」と、度々申されければ、落とまり給ひけり。本領すこしも相違なく、安堵せられければ、むかしの芳志を報じ給ふとおはえし。

頼盛残留話が頼朝の拳兵を語る文脈で持ち出される(下巻)「頼朝義兵を挙げらるる事並びに平家退治の事」。特に直前で池禪尼への恩を深く感じている姿を先引のごとく記す「平治」にあつては、ここで頼朝の意識や人格が重ねて印象づけられることとなる。

加えて注目すべきは、頼盛の残留が頼朝の言葉を持たんでのこととされている点である(傍線部)。さらに、流布本の傍点部「されども」という逆接表現には、頼盛の行動を不自然なものとみる認識が窺え、また二重傍線部のごとく頼朝の報恩という側面がより明確に打ち出されてもいる。このように、「平治」収載の後日譚において、頼盛は恩義をわきまえた頼朝の姿を語るために利用される素材となっているのである。「平治」に現れるこうした頼盛の扱いや頼朝との関係性は、まさしく先に「平家」後出諸本に見えた状況と符合する。「平家」と内容面でのすりあわせが図られつつ展開していったとされる「平治」⁽¹⁷⁾とも、頼盛を扱う姿勢が通底していることの意味は軽くあるまい。

「吾妻鏡」で視線が頼朝の側に向けられ、その人格や政治を語る一軸として頼盛との関係が扱われていることについては、同書が幕府の編纂物であることを差し引く必要がある。それでもなお都残留以後の頼盛の置かれた状況が、「平家」に限らずとも旧恩を忘れぬ頼朝の情けを語る格好の素材とされ続けたことは、以上の事例から十分に推察し得よう。真の理由がどうあれ、結果として頼盛(やその子供たち)は頼朝との関係の中で生き続けた。それ故に頼盛の事跡が必然的に有することとなる、頼朝の人格を語る素材としての側面が、先に指摘したような「平家」の展開過程における頼盛形象の変貌・一面化と無関係であり得たとは思われない。ただし、そうした変貌が頼朝の情けを語るべくして生じたとはまでは言えまい。第一義的にはやはり悲哀感を伴う「平家都落ち」構築への志向との相関性の中で導かれたものと判断するのがより妥当であろう。しかし、ひとたびそうした方向性が生まれ、宿命的に頼盛という素材が有する先述のごとき側面が、その定着・継承を背後で支え続けたのではないか。「平家」が語る頼盛の姿は、こうした複数の志向の狭間で、それらの作用を受けながら強く規定されていったものと考えられるのである。

六 おわりに

ここで改めて冒頭に掲げた「秘伝抄」の記述に立ち戻つてみる。以上の検討を経た今、そこに現れた批評眼を決して近世ゆえの産物として片づけることはできない。流布本に至る語り本系のみならず延慶本以外のいずれの現存諸本に接する場合でも、偏差

こそあれ、一門からの転身という負のイメージを背負った頼盛が姿をみせるのである。奥書の記載を指標とするならば、先述の延慶本・覚一本に加え、盛衰記との共通祖本の段階が探られつつある四部本に記される文安三（二四四六）年もしくは同四年という時期も見逃せない。物語変容の過程では、十四世紀中には既に頼盛形象の変貌は大きく進展しており、それによって彼の人物評も次第に実態を離れた一面的なものへと方向を定められつつあったと考えられるのである。「秘伝抄」に現れた頼盛評は、中世を通じて「平家」が膨大な異本を生みだしつつも普遍的に継承し続けた頼盛形象によって規制されてきた中世人の歴史理解の延長線上に存在していることを、受け止める必要があるだろう。

こうして創出された頼盛像等によって際立つ、平家一門の哀れな都落ちという事件理解は、今日の一般的な認識にも繋がる。抽象的な物言いではあるが、現代にも作用し続けるこうした「平家」の規制力の形成過程、〈平家物語〉への途を照射する中に、物語に変容を促し、歴史への批評力を養っていった幾つもの時代相や中世人の思考法、或いは嗜好といったものに接する糸口の一つがあるのではないか。「平家」（そして軍記物語）の変容はそうした関係性の中で進展していったものと思しい。かかる見通しの下、中世の文化環境・精神的状況との均衡関係の中で物語変容論の可能性を模索する試みをさらに続けて行かねばなるまい。

注(1) 「平家物語研究事典」「平家物語評判秘伝抄」の項。同書の引

用は早稲田大学図書館蔵本に拠る。以下「秘伝抄」と略称する。

(2) この後には頼盛の処置に関して、義仲らへの配慮を述べる実家・定房の補足意見が続いている。

(3) 頼盛が院と近い関係にあったこともこうした雰囲気に関与したものと推察される。「吉記」にはこの後、後白河院の近くに伺候する頼盛の姿が繰り返し見える。また、頼朝が鎌倉を出たとの報に、他ならぬ頼盛が「行向」うことが議定されており（「玉葉」寿永二年十一月二日条、朝廷にとつてその関係に利用価値があったとおはしきことも見逃せない）。

(4) 覚一本の引用は岩波旧大系本、屋代本は「屋代本高野本対照平家物語」（新典社）に拠る。適宜影印本を参照した。

(5) 日下力氏「後宋の平氏——軍記物語成立期の歴史状況——」（『文学』季刊6—3 一九九五・七）に指摘がある。なお、延慶本の引用は汲古書院刊影印本に拠る。勉誠社刊翻刻を参照しつつ、私に句読点などを付した。

(6) 拙稿「平家都落ち」考——延慶本の維盛と頼盛をめぐって——」（『日本文学』48—9 一九九九・九。以下、前稿と称す）。

(7) 大羽吉介氏「抜丸説話と平頼盛平氏——門離反をめぐって」（『駒沢国文』22 一九八五・二）など。

(8) 前稿及び拙稿「抜丸話にみる『平家物語』変容の二様相——軍記物語と刀剣伝書の世界——」（『国語と国文学』掲載予定）において、抜丸話の変質という観点からこの点に言及した。なお、それらの中で述べたように、現存諸本の都落ち関連の叙述は、延慶本のごとき叙述形態を基点として様々に改編されたものと考えられる。

(9) 北方との馴れ初め話は、延慶本では構成表に示した部分より前で語られている。なお盛衰記の引用は勉誠社刊影印本（慶長古活字本）に拠り、私に句読点などを付した。

(10) 前稿で述べた延慶本における当該名寄せの機能との相連にも注意。

(11) 注(5) 日下論は、延慶本の中に頼盛像の揺れを指摘している。

(12) 二重傍線部 a についても記事⑩を顧みる必要がある。そこでは女院御所へ入った頼盛が貞能焔洛の報に接して女院に助けを乞う様子

や、池殿の門前に落首の札が立てられたことが記される。延慶本にも存するこの記事の結びとして、盛衰記は「有為無常ノ境ト云ヒナガラ、命ヲ惜身ヲタバフ事、定テ可後悔ヲヤ。年来芳志アル一門ヲ捨テ他門ニ帰伏シ給ヌル事ニモイケル甲斐ナシトゾ人申ケル」(巻第三十一「小松大臣如法経」という落首の文面を踏まえた独自の批評を加える。ここに表れた批評の観点や頼盛理解が、aと均質であることもまた一目瞭然なのである。

(13) 佐伯真一氏「『平家物語』と『保暦間記』」——四部本・盛衰記共通祖本の想定——(『中世文学』40 一九九五・六 ↓ 『平家物語淵源』へ一九九六・九 三弥井書店)収録)などが指摘する両本の共通祖本の問題とも関わろう。

(14) 四部本・南都本の引用は汲古書院刊影印本に拠り、私に句読点を付した。

(15) 全九例中、頼盛の行動として記されるのは、以仁王事件で若宮を六波羅に連行したという記事(治承四年五月十六日条)のみ。

(16) 以下『平治物語』の引用は古態本が岩波新大系本、流布本は同旧大系本に拠る。金刀本にはこの言葉が記されないが、池禪尼の言を畏まって承る頼朝の姿は描かれている。

(17) 日下力氏「平治物語の成立と展開」(一九九七・六 汲古書院)所収の諸論考に詳しい。拙稿「『平家物語』巻第一「御輿振」の変容とその背景——屋代本より語り本の展開過程に及ぶ——」(『国文学研究』122 一九九七・六)でもその一例を指摘した。

(18) それは中世を通じて形成されていった頼朝の存在感の大きさとも連動する問題と考えられよう。この点はより多角的に探究したい。

(19) 盛衰記は明確な形で批評を加えてもいた(第三・四節参照)。「平家物語」の影響を受け、十四世紀中頃の成立と目される「保暦間記」が、「池大納言頼盛ハ、頼朝ヲ憑テ都ニ止マリ玉ヒケリ」と記すことも、その規制力を窺わせる一例である(引用は佐伯真一氏・高木浩明氏編「校本保暦間記」に拠る)。また、「公卿補任」は

寿永二年の頼盛について、「族雖赴西海独留洛中」と記す。ここにも「平家物語」(語り本系か)の影が透かし見えることを付言しておく。

(21) 記述の比重や分量的制約の問題もあるのだろうが、今日、平家都落ちに際して頼盛他多くの残留者がいたことを積極的に取りあげる通史的記述は少ないように思われる。本稿で述べきたった「平家物語」が及ぼす問題を踏まえると、例えば網野善彦氏「日本社会の歴史(中)」(一九九七・七 岩波書店)の「この情勢の中で平氏一門は京都を捨て、幼い天皇安徳を擁して西国に向かった。結果的にはこれが平氏の悲劇のはじまりとなるが……」という記述が、一面で持つ「危険性」を自覚する必要を認識させられる。

〔付記〕投稿後、小林美和氏「延慶本平家物語の頼盛——物語作者の倫理観をめぐって——」(『青須我波良』55 一九九・十二)が発表されたことを知った。その論旨を本稿の中で踏まえることはできなかったが、延慶本の頼盛に関する私見との違いは、併せてご覧いただければ明瞭だと考える。